台大日本語文研究第 7 期
2004 年 12 月，頁 111~148
本文 2004.9.30 收稿，2004.10.24 通過刊登

動詞「はしる」的多義構造分析

謝豐地　正枝*

摘　要

本稿根據認知意義論，對於日語動詞「はしる」的多義構造進行分析。首先，分析支持「はしる」所表示的各種意義的意義特徵，再研究這些多數的意義之間所存在的意義性相互關係。接著，闡明表示各種比喻的類似性及接近性等意義關係或者家族類似性等意義關係和衍生多義的新意義之過程是如何地有相關性。根據其結果，分析從原型所構成的基本意義擴張變化至新意義的過程之結構，解析支持「はしる」所表示的複數意義概念之多義構造。

關鍵詞：多義性、多義性別義、隱喻、換喻、意義性擴張

臺灣大學學術期刊資料庫

* 臺灣大學日本語文學系教授

A Cognitive Linguistic Analysis of Polysemic Meanings of Japanese Verb "hashiru(to run)"

Hsieh, Masae Toyochi*

Abstract

This paper intends to analyze the semantic structure that supports polysemic characteristics shown by a Japanese verb “hashiru (to run)”. By applying cognitive linguistic theories, this paper clarifies how the semantic components called the prototypical category forms the main meaning of “hashiru”. The paper examines to what extent semantic relationships based on the outward growth of a lexical network by extension from prototypes are directly involved with production of new polysemic meanings. Based on the facts found by the analysis, as a conclusion, the paper categorizes 20 polysemic meanings that the verb “hashiru” expresses, and clarifies how semantic relationships among these 20 polysemic meanings are extended from prototypes.

Key words: Polysemy, Polysemic Meanings, Metaphor, Metonymy, Extension from Prototypes

臺灣大學學術期刊資料庫

* Professor of the Department of Japanese language and Literature, National Taiwan University

動詞「はしる」の多義構造に対する分析

謝豊地　正枝*

要　旨

本稿は認知意味論の理論に基づいて、日本語の動詞「はしる」の多義構造に対して分析したものである。まず、「はしる」の表すそれぞれの複数の意味を支える意味特徴を分析して、それら複数の意味の間に存在する意味的な相互関係を考察する。そして、さまざまな比喩が表示する類似性及び近接性などの意味関係、或いは、家族的類似性などの意味関係が、多義の新しい意味が派生するプロセスにどのように係わっているかを明らかにする。その結果に基づいて、プロトタイプ（中心的な意味特徴で基本的な意味を形成する構成メンバー）が構成する基本的な意味から新しい意味へと変化する拡張プロセスのメカニズムを分析して、「はしる」の表す複数の意味概念を支える多義構造を解明したものである。

キーワード：多義性、多義的別義、メタファー、メトニミー、
意味的拡張

臺灣大學學術
期刊資料庫

* 台湾大学日本語文学系教授

動詞「はしる」の多義構造に対する分析

謝豊地　正枝

一、 本稿の目的と問題提起

本稿は、動詞「はしる」が表すさまざまな異なる多義的な概念を明らかにした上で、それぞれの異なる多義的別義によって表される諸概念がどのような意味特徴によって支えられているかについて分析・考察する。そして、その結果に基づいて、「はしる」の持つ多義構造を解明することを目的とする。「はしる」によって表される基本義及びそれぞれの多義的別義を構成する意味特徴にはどのようなものが存在するのか、また、それぞれの多義的別義の間に存在する意味関係はどうであるか、などの問題について解明するために、認知意味論的な理論に基づいて分析・考察し、「はしる」の多義構造の解明を試みる。

（一）先行研究

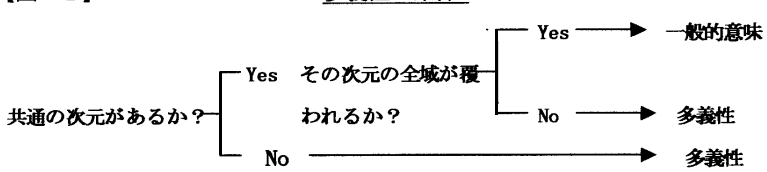
日本語における動詞の用法に関する辞典として、小泉・仁田らによる『日本語基本動詞用法辞典』がある。この辞典の動詞の表す概念に対する分類法は、それぞれの動詞が表す多種類の概念を文脈に依存して分類しており、多義派生のプロセス及び意味構造のメカニズムの視点に基づいて分類しているわけではない。現段階では、多義派生のプロセスの相違及び意味構造の相違という観点に基づいた動詞の表す意味を分類した辞典は未だ編纂されていない。また、多義が如何に派生するかについて考えるには、まず、多義語と単義語、多義語と同音異義語を区別しなければならないが、これらの語をそれぞれのカテゴリーに区別する明確な基準も確立されているとは言えない。

例えば、池上説によれば、多義性があるかどうかという考察の対象となる語彙素について、すでにある程度のおおまかな意味分析がなされていることを前提として、そのようにして暫定

臺灣大學學術期刊資料庫

的に出された意味がそれで一つの単位と考えてよいのか、或いは、いくつかをまとめて一つの単位にした方がよいのかということを判断して決定する問題が存在する。この問題を解決するには、判断基準が摘要されねばならない。その基準は二つのステップから成っている。第一の段階として、①、②、③、...と暫定的に立てられた複数の意味について、それらに共通の意味成分が見出されるかどうかを基準にする。その基準を前提にして、ある語彙素が多義かどうかを判断するのである。次のステップとして、それぞれの意味から共通の意味成分を引き去った残りのものが互いに同じレベルで対立するようなものであるという条件下に、それらは全体としてその共通の意味成分がそのレベルにおいて結びつきうる全ての可能性を満たしているかどうかという点について判断しなければならない。それを二つ目の前提として、もし、全ての可能性が満たされていなければ、多義であると判断するのである。以上の池上説を下記に図で示す。[1]

【図　1】　　多義性の条件



池上説の問題点は、二つの条件を充たす前提にあるものと思われる。すなわち、この前提を摘要するためには、ある語が表示する、「異なる複数の意味」としてどのような意味を基準にするかを決定しなければならない点である。考察の対象になる全ての語に、果たして「共通成分があるかないか」という点については、どんな意味を基準として立てるかによって変化す

[1] 池上嘉彦『意味論――意味構造の分析と記述』、1993年度版、大修館書店、p.135－p.136。

臺灣大學學術期刊資料庫

る筈のものであるからである。[2]

関連して、同音異義と多義の間に、果たして明確な境界線を引くことが出来るかどうかという問題も存在する。この点に関する R.A.Waldron の観点は、同音異義と多義の間の境界線は、はっきりと引けるものではなく、実際には、語の現在の形やその語の示す複数の意味、それらの意味の間に存在す相互関係、そして、その語の語源さえもが、同程度に考慮に入れられて境界線が引かれるのが望ましいとみなす。[3] また、John Lyons の観点は、複数の意味の間に互いに関連性があるかどうかという要素以外にも、母語話者の直観、及び、話し手の個人的な差、などにも関係があると指摘する。[4] 一方、国廣説は、多義認定の手がかりとして、例えば、意味的に包摂関係、或いは、包含関係にある語がタキソノミーにおける体系において、意味的に「上位と下位という、異なるレベルに位置する場合」とか「異なった反義語が存在している場合」も多義認定の手がかりになると見なす。また、国廣説は、Lyons 説に同意して、同一の音形によって表される複数の意味が、意味的に関連を持たない場合を「同音異義語」、意味的に関連を持つ場合を「多義語」という基準を提起した。[5] 同音異義と多義性の相違に関する前述のような先行研究があるものの、現在に至っても両者の間にはっきりとした境界線を引くための明確な基準に対する共通に統一された見解が確立されていないのが現状である。

本稿では、前述の先行研究の結果を踏まえて、動詞「はしる」には複数の意味があるかどうかを明らかにした上で、「はしる」が多義語であるかどうかを判断する。

---

[2] 籾山洋介「多義語の分析方法―多義的別義の認定をめぐって―」『名古屋大学日本語日本文化論集』第１号、名古屋留学生センター、p.35－p.57。
[3] R.A.Waldron, Sense and Sense Developement, Andre Deutsch Publishers, W. Germany, p.65.
[4] John Lyons, *Semantics I, II,* Cambridge University Press, 1977, p.551－p.552.
[5] 国廣哲彌『意味論の方法』、1982、大修館書店、p. 97、p.108－p.110。

臺灣人學學術期刊資料庫

（1）私は毎朝公園を走る。

（2）木曽川は濃尾平野を走っている。

において、(1) 文中の「はしる」は、「(人がある場所を) 迅速に移動する」ことを表示する移動動作を示す自動詞であり、(2) 文中の「はしる」は、「(川がある場所を) 迅速に流れていく」意味を表現する。したがって、「はしる」という一語に結び付けられたこれら二つの異なる意味によって、「はしる」は同音意義語ではなく、多義語であると判断できよう。尚、本稿において、動詞「走る」を特に平仮名で「はしる」と記す理由は、中国語における「走」は日本語においては「歩く」の意味であるために、中国語母語話者が「走る」と記述されている動詞を読む時に、意味的に「歩く」を想定することを避けるためである。

二、動詞「はしる」の多義構造に対する分析と考察

（一）動詞「はしる」の表す概念の支配する意味領域に対する考察

まず、動詞「はしる」の表す概念がどのような意味領域を支配するかについて明確にするために、「はしる」という概念によって支配される意味領域と、空間を移動する動作を表すその他の動詞である「跳ぶ」「歩く」などの概念が支配する意味領域との間に存在する差異について考察する。

第一に、「はしる」と「歩く」のそれぞれの表す概念によって支配される意味領域の差異に対して分析・考察する。人の身体的特徴に基づけば、「歩く」動作よりも、主に「はしる」動作の方に向くように進化したと見なされている。[6] このように、

[6] The China Post published on Nov. 20th, 2004, p.11, based on scientific article titled “Human: Born to Run” written by Dr. Dennis Bramble, University of Utah, and published in *Nature*, Vol. 432, Nov. 18th, 2004.. Bramble は、このレポートの中で、チンパンジーなどの「歩く」動作を主にしていた動物の身体的特徴と比較すると、

臺灣大學學術期刊資料庫

人間にとって最も基本的な動作である「はしる」「歩く」は、共に空間を移動する動作を表す動詞であるが、それぞれの概念によって支配される意味領域は微妙に異なる。

（3） 毎朝、私は家から駅まで歩いて行く。

（4） 今朝、遅く起きたので、いつもの汽車の出発時間に間に合わないと思って、家から駅まで走って行った。

において、「はしる」と「歩く」によって動作主（基本的には人及び動物）によって支配される「空間」（起点である「家」から目標地点である「駅」までの地表上の距離と空間）は同じである。しかし、「はしる」の方は、動作主が認知した理由（例えば、（4）の場合は、「汽車の出発時間に遅れないため」という差し迫った理由）によって、「『歩く』動作にかかる時間よりも短縮された時間内に『はしる』という動作を完了すること」を目的として動作が開始される。「歩く」動作に従事するにはそのような時間的に差し迫った理由は必要としない。この点に「はしる」と「歩く」の表すそれぞれの概念の間に差異が見出される。言い換えれば、「はしる」という動作は、「歩く」による「起点から目標地点までの地表上の空間を連続的に移動する」という目的に加えて、「同じ距離を移動するのであっても、何らかの時間的に差し迫った理由・目的のために、『歩く』動作によってかかる時間よりも短時間でその空間を前方に移動する連続的な動作を完了しなければならない」という第二の目的がある。そして、これらの二つの目的を、動作主が「認知して認識し、『歩くよりもはしるべきだ』と判断したこと」によって、始めて「はしる」という動作が開始されることが分かる。したがって、「はしる」が支配する意味領域は、「歩く」が支配する意味領域よりも「同じ空間を移動するのに、『あるく』よりも短時間で完了しなければならない時間的に差し迫った理

人の身体的特徴は、「歩く」動作よりも「はしる」動作に向くように進化したと指摘する。

臺灣大學學術期刊資料庫

由と目的」が、動作主によって明確に認知されており、自らに「はしれ」と命令して「はしる」という動作が開始されて、(A)動作主によって認識された理由・目的を達成した時点、或いは、(B)動作主によってその理由・目的が達成できないと認知されて「はしる」動作を放棄すると判断した場合、の二つの状況下において、「はしる」動作は完了に至ると捉えることができよう。下記を見られたい。

(5) 銀行に金を返す工面をするために、金策のために友達の間を走り回った。

(6) 特売売り場のドアが開くや否や、外で待機していた買い物客は買いたい商品が展示してある場所に走った。

(7) 裏山で熊に襲われそうになったので、走って逃げた。

(8) 200メートル競争では、競争相手に負けないように(或いは「それまでの記録を破れるように」)全力で走った。

(9) 健康のため、毎朝、私は公園を走っている。

において、(5)文は、「ある到達点に『歩く』によってかかる時間よりも速く到達しなければならない、時間的に差し迫った理由のため」、(6)文は、「『はしらない』ことによって、なんらかの不本意な結果に陥ることを免れるという理由のため、(7)文は、「危険から身を守るため」、(8)文は、「レースにおいて、或いは、何らかの競争において、明確な競争相手(或いは「それまでの記録」)との競争に勝つため」、(9)文では、「健康を維持する運動の一環として」、というようにそれぞれの文では文中の動作主によって、「はしる」動作を開始すべき理由或いは目的がはっきりと認識されて、その結果、「はしる」動作を開始すべきだと判断されていることが分かる。

関連して、正常な状態では、「はしる」と「歩く」の動作は、ともに右足と左足を交互に動かして前方に移動する動作を指す。例えば、右足、或いは、左足、を一歩踏み出しただけで、反対側の足をその踏み出した足に揃えてしまえば、すなわち、

臺灣大學學術期刊資料庫

どちらかの足によってある方向に単に一歩のみを踏み出しただけであったならば、この動作は「・・・の方向に動く」と見なされて、「歩く」動作であるとは見なされない。また、例えば、右足のみを用いて地表上を二歩以上移動する場合には、「跳ぶ」という異なる動作になってしまって、「歩く」とは見なされない。そのため、「はしる」「歩く」の動作が完了するのは、右足で一歩、左足で一歩、というように、左右の足を交互に動かして、地表に水平に二歩前方に移動した時点で「はしる」「歩く」の基本的な動作が一単位として完了するものと考えられる。そして、動作主が移動したいと願う距離によって、この基本的な動作は連続していく。短い距離であれば、「はしる」「歩く」という二つの動作は二、三歩でも完了するし、長い距離であればあるほど、「はしる」「歩く」という二つの基本的な動作は、何度も数回繰り返し連続的に続けられていく。この点から、「はしる」「歩く」の動作が開始されて完了するまでに必要な、基本的な動作の回数と、それらの動作が完了するのに必要な時間は、動作主が移動したい距離によって変化する相対的なものであることが分かる。

次に、右足及び左足を交互に用いて移動する際の「移動するし方」に関して、「はしる」と「歩く」の二動作間に差異が存在するかどうかについて考える。「歩く」の方は、空間を移動する時、動作主の足の一つが必ず地表に接していなければ「歩く」動作とは見なされないが、「はしる」の方は動作主の足の一つが必ずしも地表に接していなくともよい。すなわち、「はしる」の方は、一瞬ではあっても、全ての足が地表に接していない状態であっても、地表に水平に素早く前方に移動する動作によって意味領域が支配されていると見なすことができるであろう。最後に、「歩く」という、左右の足を交互に動かして一歩前方へ移動する基本的な動作によって移動できる距離は、動作主の歩幅と同じ距離、或いは、歩幅以下の距離、の二種類

臺灣大學學術期刊資料庫

であろう。これに対して、「はしる」動作によって移動する距離は、「ちょこちょこと走る」によって表現されるように動作主による歩幅以下の距離の場合、或いは、歩幅と同じ距離、若しくは、動作主の歩幅よりも多少長めの距離、の三種類が考えられよう。もし、動作主の歩幅よりも非常に長い距離を水平に前方へ移動したのであれば、「はしる」動作であるよりも、「跳ぶ」動作であると見なされるからである。

第二に、「はしる」と「跳ぶ」の概念によって支配される意味領域の差異に対して分析・考察する。「跳ぶ」の概念が支配する意味領域が「はしる」の概念が支配する意味領域と比較すると、どのような点において差異が見出されるかについて考察する。

（10）高い枝にある柿の実を、跳び上がってもぎ取る。
（11）ゴールのバスケットに向かって、片足で跳び上がってスラムダンクを決める。
（12）高い崖に跳び上がる。
（13）高い崖からとび下りる。

において、（10）文中の「跳ぶ」の表す概念は、地表上のある起点から、目標地点である柿の木の枝の高さまで、両足を揃えて空間を垂直に移動して、枝になっている柿の実をもぎ取る動作を表現している。「跳ぶ」動作の場合、もし、片足で跳ぶ場合には、通常、「片足跳び」、或いは、（11）文のように、「片足で跳ぶ」というように、明記する。すなわち、「跳ぶ」動作は「両足を揃えるか、若しくは、片足のみで、空間を移動する」概念を表すものと考えられよう。

それでは、次に、「跳ぶ」動作は「跳んで目標地点に到達した後で『下りてくる』という動作を含んでいるか」について考える。（10）文中の「跳ぶ」は「柿の枝になっている柿の実」をもぎ取るために「跳ぶ」のであるが、あたかも「柿の実をもぎ取った後でその高さの目標地点から下りてくる動作」も含ん

臺灣大學學術期刊資料庫

でいるかのように見える。(11) 文中の「跳ぶ」も同じである。しかし、(12) 文中の「跳ぶ」動作は、地表上のある地点を動作の起点としてはいても、地表に対して高い所に位置する「崖の上（目標地点)」に、すなわち、地表に対して垂直的に上の高い方向に向かって「跳び上がる」動作を表す。そして、「崖の上」に跳び上がった後、動作が開始された、もともとの動作の起点の場所には戻らない動作を「跳ぶ」で表現しているのである。

これに対して、(13) 文中の「とぶ」の場合は、高い崖が動作の起点を成しており、地表上のある着地点が目標地点である。そして、「とぶ」動作はこの着地点に到達した時点で完了する。この場合の「とぶ」動作は、地表に対して垂直的に高い位置にある所から、下に向かって「とび下りる」動作を表現しており、「とび下りた」後で、もう一度、動作の起点である崖の上に跳び上がる動作を含んでいるわけではない。このような「高い処から低い処へと下方の方向に向かってとびおりる」動作を表す「とびおりる」には、「飛び下りる」と記されることが多い。この点において、「跳ぶ」と「飛ぶ」の表す概念の間に存在する差異に関して更に分析・考察して明らかにしなければ、現時点では明確にはできないため、本稿では、暫定的に「とびおりる」と平仮名によって記述する。ともあれ、以上の観察に基づくと、第一に、「跳ぶ」動作とは、ある目的及び目標地点に到達しようとする動作主の意図・願望の存在が必要である。そして、その目的地点は、「動く」「歩く」「はしる」などの動作によっては到達できないような「高い処」であり、しかも、素早く動作を完了させなければならず、「跳ぶ」動作によってならその目標地点へ到達する可能性があるとの動作主の「選択判断の下」に従事される動作であることを示している。そのため、「跳ぶ」動作の支配する意味領域の内、地表に対して垂直的に上方に向かってさっと空間を移動する動作、(並びに、もし、

臺灣大學學術期刊資料庫

垂直的に下方に向かって空間を素早く移動する動作が「跳ぶ」の支配する意味領域内の範疇であれば、下方の方向に向かって「とぶ」動作も含む）によって形成されており、動作の起点から目標地点に到達した時点で動作が完了する、との結論が導き出される。

それでは、次に、「跳ぶ」の概念が支配する意味領域には、地表に対して垂直的に空間を上或は下の方向へ素早く移動するのに加えて、地表に対して水平の方向へ向かって前方に素早く移動する動作も含むのか、について考える。

（14）走り巾跳の動作は、踏み切り地点まで両足で走り、踏み切り地点から片足で、地表に対して水平の方向に、できるだけ長い距離を飛び越えるように一回だけ空中を跳んで、両足で着地する。

（15）三段跳の動作の場合は、踏み切り地点まで両足で走り、そして、踏み切り地点から、まず片足で地表に対して水平の方向に、できるだけ長い距離を跳び越えるように跳躍してから踏み切った足で着地する。次の跳躍では踏み切りと反対側の片足で跳び上がり、再び地表に対して水平の方向に、そしてできるだけ長い距離を跳び越えるように跳んで、最後に両足で着地する。

においては、「跳ぶ」という動作が「地表に対して水平の方向に、できるだけ長い距離を飛越する（英語の「to leap」に相当する）」ことを目的にした動作であることが見出せる。したがって、「跳ぶ」の概念を表す意味領域には、このように長い距離を飛越するという意味が、前述した「跳ぶ」動作が、地表に対して垂直的に上（下）の方向へと空間をさっと短時間に移動するという目的をもった動作（英語の「to jump」に相当する）を表す概念に加わっていることが分かる。言い換えれば、日本語における動詞「跳ぶ」の概念が支配できる意味領域は、英語における「to hop（ぴょんと跳ぶ），to step（一歩踏み

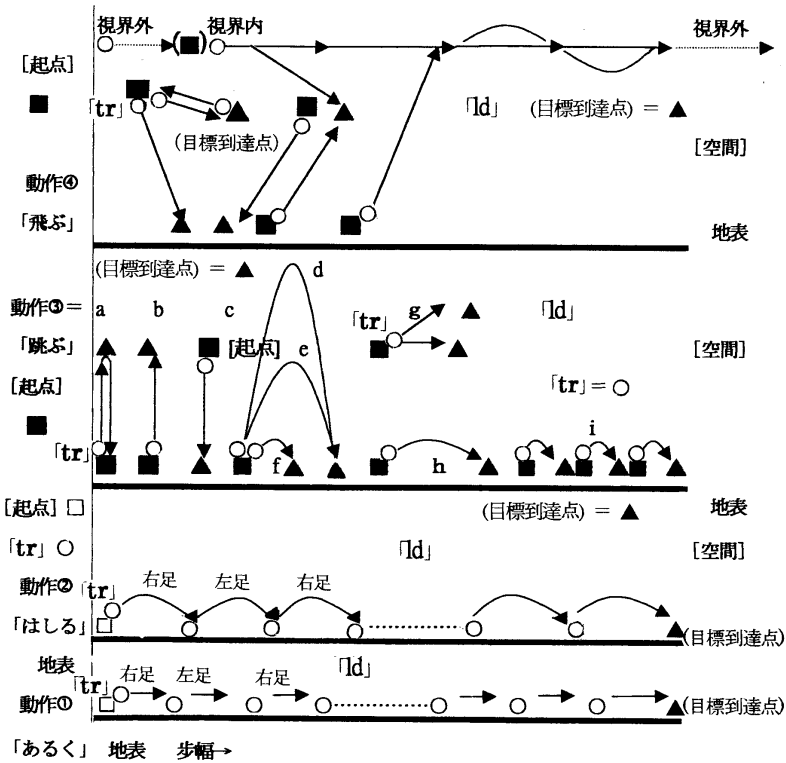
臺灣大學學術期刊資料庫

出す、一跳びする），to jump（跳び上がる、跳び越える），to leap(踊り越えるように飛越する)」などの語の概念が表す意味の全てを表現することができる広い意味領域を含んでいるものであることが観察できよう。したがって、「はしる」の表す概念に比べると、「跳ぶ」の表す概念の方が、意味的に多様な振る舞いを見せるのみではなく、その支配する意味領域も「はしる」の概念が支配する意味領域よりも広いとの結論が導き出されよう。本稿では紙面の関係上、「飛ぶ」に関する意味的な側面に対する考察を割愛する。以上の分析によって明らかにされた諸点に基づいて、動詞「飛ぶ」「跳ぶ」「はしる」「歩く」の概念によって表されるそれぞれの最も基本的な動作の軌跡を認知的に促えたものを【図　2】に示す。尚、図における「ｌｄ」印は動作主が移動する「空間」を「ランドマーク」として促え、「ｔｒ」印は「○」印で表示される「動作主」を「トラジェクター」として促えたそれぞれの動作の軌跡を表示する。

臺灣大學學術期刊資料庫

【図　2】　「歩く」「はしる」「跳ぶ」「飛ぶ」の概念が表す動作の比較表

（「ld」=「空間」「tr」=「動作主」= ○、各々の動作を終了させる時間の表示は含まない）



「ａ～ｉ」が付された動作に対する説明：　ａ＝地上のある起点から垂直に上方へ跳び上がり、同じ起点に戻る動作　ｂ＝地上のある起点から垂直に上方へ跳び上がって高い処にある別の地点に到達する動作　ｃ＝地表より高い処にある起点から下方へとびおりる動作　ｄ＝地上のある起点から空中へ高く跳び上がり、最高地点から下降して来る途中で目標点に到達して完了した動作　ｅ＝地上のある起点から上方へ高く跳び上がり、しかも長い距離を飛越して地上の別の地点に到達する動作　ｆ＝歩幅程度の距離を跳ぶ動作　ｇ＝地表よりも高い処にある起点から同じ高さの処へ、或いは、より高い処へ跳ぶ動作　ｈ＝起点から水平にできるだけ遠い地点に飛越して跳ぶ動作　ｉ＝ぴょん、ぴょんと跳ぶ動作

臺灣大學學術期刊資料庫

（二）多義語による基本義と多義的別義との間の「意味関係」に対する考察

「語」の表す基本義と多義的別義とが示す二つの意味の間に存在する「意味関係」の種類としては、(1) 心的視点の相違によるもの、(2) 転移、(3) 部分転用、(4) 推論的意味、(5) メタファー的転用、(6) シネクドキー的転用、(7)、メトニミー的転用、(8) 具象化転用、(9) 上下関係、(10) 特殊化転用、(11) 集合化、などがある。[7] また、語の多義性は、基本義から別義へと意味的に拡張する。そして、この意味拡張には、意味レベルでの（１）類似性、（２）近接性、（３）家族的類似性、などの「意味関係」が係わっているのである。

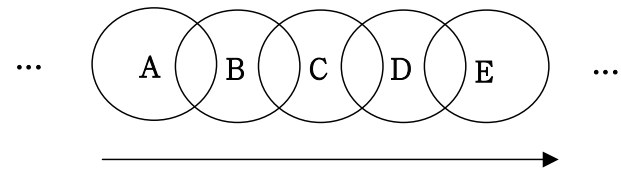
類似性とは、語彙の意味的な内部構造を構成する一単位要素をｘ、それ以外のある一単位をｙ、とすれば、ｘとｙとの間に何らかの共通の特徴を有している連想関係である。また、近接性の関係とは、ｘはｚと共起関係にあり、そのような場合には、ｘは、①ｚ、②ｘｚ、③ｘｚにおいてｘの代わりに起こりうる単位ｘ’，という結びつき方による意味的な連想関係である。[8] これに対して、　家族的類似性とは、例えば、
ある多義語の異なる多義的別義[１]から別義[５]を、それぞれＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅとした場合に、これらの意味概念はＡからＢ、ＢからＣ、ＣからＤ、ＤからＥへというように、同じ意味カテゴリー内の多義性の連鎖（或いは多義性のリンク）によって関連づけられていることを指す。それを【図　3】として示す。[9]

---

[7] 国広哲弥『意味論の方法』、1992 年度版、大修館書店、ｐ．111 － ｐ．128。
[8] 池上嘉彦『意味論の方法―意味構造の分析と記述』、1993 年度版、大修館書店、ｐ．257。
[9] 山梨正明『認知言語学原理』、2000 年、くろしお出版、p.196。

臺灣大學學術期刊資料庫

【図　3】　　多義性の連鎖図



（三）動詞「はしる」の多義性及び意味の拡張パターンに対する考察

1. 基本義

「はしる」の基本義は、＜人・動物が自らの意思と目的を持って＞＜その体の一部を地表に接触させながら＞＜地表に対して水平な方向に向かって＞＜自力で迅速に滑らかに動いて前方に移動する連続的な動作＞という意味特徴によって構成される概念である。「走る」移動動作を形態的にとらえている自動詞である。

（16）喫茶店で彼から別れを告げられた後、私は泣きながらそこを走り出た。

（17）健康を維持するために、私は毎朝公園を走っている。

（18）汽車に乗り遅れそうなので、私は家から駅まで走った。

（19）母も毎朝公園を 5 時半から 6 時まで走っている。

（20）？ 猿は枝から枝へと走る。

（21）？ 佐藤さんは山登りに行くと、岸壁を上に向かってするすると走る。

（22）？ 林さんは逆立ちをして道を走っている。

において、(16) 文中の「走る」は、補語を取らなくても、「地上を足でさっと早く滑らかに動いて移動する行為・行動・動作」を形態的に捉えて表現する。(17)（文中の「走る」は、移動動作が進行する空間を指し示す「を」格に後接する用法を表す。(18) 文中の「走る」は、「起点を示すある場所から目標地点である場所まで」という、移動動作が進行する空間を示す「を」

臺灣大學學術期刊資料庫

格と共に用いて、状況的なむすびつきを表す連語の用法を示す。（19）文中の「走る」は、「起点となるある時間から目標時間点である時間まで」という、移動動作が進行する時間を示す「を」格と共に用いて、状況的なむすびつきを表す連語の用法を示す。[10]

一方、（20）から（22）の文中の「走る」は不自然な表現であることを示す。（20）文においては、移動動作が進行する空間が地表ではないため、「走る」とは共起できないので、このような移動動作の場合は「飛ぶ」「飛び移る」などを用いる方が自然なのである。（21）文においては岸壁のように、垂直な表面を上に向かう移動動作の場合は、通常、「登る」「上る」を用いて「走る」を用いて表現しない。（22）文における「走る」は「逆立ちして道を移動する」場合は「さっと速く移動できない」動作であるため、「走る」による表現は不適格である。

本稿では、以下、＜人・動物が自らの意思と目的を持って＞＜その体の一部を地表に接触させながら＞＜地表に対して水平な方向に向かって＞＜自力で迅速に滑らかに動いて前方に移動する連続的な動作＞基本義をプロトタイプと見なす。基本義が意味的にどのように変化・拡張していくかに関しては、前項において既に指摘したように、人が自らの意志・目的を持って「はしる」によって表される概念を行動するという、認知意味論的な用語で表現される「有契性」を示すということを、カテゴリー化基準の中心にして、「はしる」のそれぞれの多義的別義を分析・考察していく。

2. 多義的別義［２］

「はしる」の多義的別義［２］が表す概念は、＜人・動物などが自らの意思と目的をもって＞＜その体の一部を地表に接触させながら＞＜地表に対して水平な方向に向かって＞＜自

[10] 鈴木重幸・鈴木康之『日本語文法・連語論』言語学研究会、1983年、むぎ書房、p.22。

臺灣大學學術期刊資料庫

力で全力を以って前方に移動する連続的な動作＞という意味特徴によって構成される「駆ける」「疾走する」という概念である。基本義によって表される行為・行動の早さよりもっと速く空間を移動する行為・行動を指す。

（23）昔の飛脚の仕事は、長距離を出来る限り短時間で走って手紙をあて先に届けることであった。

（24）アラビア産の駿馬は日本産の馬の傍らをさっそうと走り抜けた。

において、（23）（24）文中の「走る」は自力で全力疾走する動作を表す。

3.多義的別義［３］

「はしる」の多義的別義［３]は、〈無生物である水などが〉〈地表に接触しながら〉〈迅速に滑らかに動いて移動する動作〉という意味特徴によって構成されている「水・川などが流れる」という概念を表す。移動動作の主体が人・動物ではない無生物の具象物の水・河などであり、人・動物の意志とは関係のない移動動作を表す。この多義的別義[3]が表現する動作には、「地表に対して水平方向に前方に向かって移動する」ものと、「地表に対して垂直方向に下方に向かって移動する」ものの二種類の方向への移動を含んでいる。

（25）石走る 垂水の上のさわらびの 萌え出でる春になりにけるかも[11]

における（25）文中の「石（いわ）走る」は「水が岩の上をはげしく走り流れる」という意味を表す。この場合の「水」とは後に「垂水」がある関係で、「滝」のことを指す。「川が走る」の表す移動動作は、一般的には、川幅の細い川が地表を水平的に長距離の間を上手から下手へさっと速く流れて移動する動

[11] 志貴皇子「万葉集」・八巻・1418、松村明ら編『古語辞典』、1991年度版、旺文社、p.132。

臺灣大學學術期刊資料庫

作であるのに対して、「滝が走る」の表す移動動作は大量の水が地表から垂直に短距離の間を上から下へとはげしく流れ落ちて移動する動作である。厳密に言えば、「川が走る」と「滝が走る」の間には、「走る」動作の進行する空間及びその進行する動作の時間的な速さの両方に差異が見出される。すなわち、「川が走る」が表現する「川の急流が岩の間を水平方向に速く流れる」動作に比べると、「滝が走る」が表現する「滝の水が滝の上から垂直に下に流れ落ちる」の動作の方が同じ距離でも水が速く移動するので、動作が完了する時間も速い。尚、この「石（いわ）走る」という文語に見出される表現は、現代語の「急流が岩の間を走る」という移動を表す動作の表現用法に承け継がれており、現代語でも用いる用法であるので、本稿では文語的表現であるという理由で以って排除するのは避けたい。

（26）木曽川は濃尾平野を走っている。【前掲】

における「走っている」は「(川が）流れている」という意味である。しかし、この文例における「走っている」という概念は、単に「(川が）流れている」という意味を表現するのみではなく、「濃尾平野という広い場所を横たわるように木曽川が流れている」という状態の意味を含意している。したがって、この文例中の「走っている」の概念は、「川の水が流れている」という移動する動作に加えて、「横たわるような状態の様子を呈して川が流れている」状態をも表現するものと捉えれば、移動動作及び状態を表現する二つの概念の境界線上にあるとも捉えることができよう。したがって、この観点から考察すれば、（27）文中の「走る」は「木曽川の急流が岩の間を流れている」動作というよりも、「濃尾平野という広い平野を木曽川がゆったりと流れている」という状態とも解釈できることを可能にするものと考えられよう。

4. 多義的別義［4］

「はしる」の多義的別義［4］は、人が心身に激しい打撃を

臺灣大學學術期刊資料庫

受けた結果、肉体上・精神上に変化がさっと発生した結果の状態・状況とか有様を表現する概念で、＜人が心身に激しい打撃を受けて＞＜それによって感じる強い感覚的なものを伴って＞＜肉体上・精神上に変化がさっと素早く発生した結果、もともとの状態が変化したありさま＞という意味特徴によって構成される概念であると考えられる。肉体的、精神的に激しい打撃を受けた結果、「痛みが走る」状態・有様の文例として、下記を見られたい。

（27）割れたガラスの破片が指に刺さったので、痛みが走った。（肉体的に急激な変化を生じる状態・ありさま）

（28）イラク戦争で死んだ子供達の写真を見て、心に痛みが走った。（精神的に急激な変化を生じる状態・ありさま）

また、下記の文例によって、肉体的に衝撃を受けて、肉体的に急激な変化を生じた状態が、精神的な領域に属する嫌悪感を表現する意味へと拡張していることを見出すことができる。

（29）見知らぬ男が急に私に抱きついてきたので、虫唾が走った。

において、「虫唾が走る」とは、ある非常に嫌悪をもよおす事態に直面して、口中に虫唾が出てきて急に吐き気をもよおすという、肉体的に否定的な嫌悪感を伴った急に吐き気をもよおすことである。

（30）今しがた交通事故に出遭った被害者の死体を見たので虫唾が走った。

において、「虫唾が走る」は「吐き気をもよおす」という意味であるが、その意味から意味的に拡張して、「甚だしく忌み嫌う時の喩え」としても用いられる。したがって、「虫唾が走る」は肉体的に実際に急に吐き気がすること、及び、精神的に甚だしく忌み嫌うという、心身の両方の領域に係わる概念を表す。下記の文例によって、肉体的に急に吐き気をもよおすことから、

臺灣大學學術期刊資料庫

精神的に甚だしく忌み嫌うことという概念へと意味が拡張している点が見出される。

（31）あんな男と結婚するなんて、考えただけでも虫唾が走る。（メタファー）

「吐き気をもよおす」から「甚だしく忌み嫌う」の意味が派生した意味的な拡張プロセスは、メタファーを支える「類似性」に基づいた意味関係によるものである。

5. 多義的別義［５］

「はしる」の多義的別義［５］は、人の意志とは関係がない自然現象の意味領域に係わる概念で、＜ある自然現象が＞＜さっと空間を速く移動する動作・現象・ありさま＞という意味特徴によって表現される、「さっと現れて空間を短時間内に移動する自然現象のありさま・軌跡」を表す。この別義の場合は、動作主（稲妻、雨雲など）の一部が地表に接触していなくても、動作は進行する。また、進行方向に関しては、動作は起点となる空間のある所から空間のある目標地点となる方向へ向かって進行するが、その進行方向は非固定的である。したがって、必ずしも地表に対して垂直的でもなく、或いは、水平的でもない、非固定的ではない方向に向かって、短時間内に移動するという、非常に速い移動動作を表現する。

例えば、下記の（32）文における「稲妻」の走り方とは、概ね、空の上方に浮ぶ雨雲から稲妻が斜め下方に向かって、しかも、その時の雨雲間に流れる電気の流れる方向に従って、左右、或いは、真下という、どの方向にでも、稲妻は走るので、進行方向は定まってはいない。その上、稲妻とは、ぴかっと光った光が一瞬の間に雨雲の間を走る現象であることを、人間は経験に基づいて知っている。これに対して、（33）文中の「雨雲」の場合は、風の向きによって、雨雲が走る方向が決定されるので、固定的な進行方向は定まってはいない。そして、雨雲が移動する空間は人間の視界の届く限りの空全体のスペースにな

臺灣大學學術期刊資料庫

るため、「稲妻が走る」より「雨雲が走る」の方が移動する空間が広い上に、時間的にも動作は一瞬の間に完了するのではなく、「稲妻が走る」動作が完了するよりも長い時間がかかる。このように、自然現象のカテゴリーに属する同じような動作であって、しかも、同じ「はしる」という動詞を用いて表現している動作ではあっても、実際の動作・現象にはズレが見出されるのである。

（32）暗い空に稲妻が走った途端、雷鳴が轟き渡った。

（33）雨雲が空を走る。

6.多義的別義［6］

「はしる」の多義的別義［6］は、〈人が身体の一部を地表に接触させながら〉〈さっと素早く移動して〉〈その移動行為に移る前に従事していた行為を継続するのを即座に放棄して〉〈身に及ぶ危険を逃れるために素早く遠くへ移動する動作〉という意味特徴によって表される「逃げる」という概念である。この別義[6]の表す概念は、「敵に捕縛されたり殺されたりされないように敵よりも速く走ること、しかも、身の安全が確保できる地点まで到達すること」が目的となっている。したがって、「走る」という動作の起点は、動作主が「闘いに破れる可能性があって己の生命が危険に陥る」ことを認知した段階であるのと同時にそのように認知した場所である。そして、「闘いの場所を即座に去って、敵よりも速く『走ってその場から安全な場所まで離れる』こと」を手段及び目的として、「身の安全が確保できる所まで到達すること」が目標地点となる。そのため、動作主自らがもくろんだ安全な場所まで到達した時点で「走る」動作は完了する。しかし、途中で不幸にも敵方に捕縛されたり殺されたりした場合には、「走る」動作は即座に完了してしまう性質を呈していることが分かる。

（34）敗色が濃くなったので、敵は武器を捨てて走った。

7.多義的別義［7］

臺灣大學學術期刊資料庫

「はしる」の多義的別義［７］は、＜人が身体の一部を地表に接触させながら＞＜さっと素早く移動して＞＜その動作に移る前に住んでいた場所を放棄して＞＜愛をまっとうさせるために遠くへ移転する動作＞という意味特徴によって表される「駆け落ちする」という概念である。

（35）愛する二人は周囲による許されない結婚に屈しないで、新しい人生を始めるために、故郷を捨てて見知らぬ土地へ走った。

8. 多義的別義［８］

「はしる」の別義［８］は、〈人がある方向に素早く移動して〉〈一足とびにある状態にまっすぐ向かう状態・動作〉という意味特徴によって表される、「抑制できない、自制できない」という感情を表現する概念である。

（36）同級生の加藤君は、貧乏に負けて悪の道に走った。

（37）意味もなく殴られた彼は、感情に走って相手を殺してしまった。

9. 多義的別義［９］

別義「９」は、〈人が動物・乗り物などに乗るなどの手段によって〉〈地表・水面にその乗り物を接触させながら〉〈全力でさっと速く滑らかに移動する行為・行動〉という意味特徴によって表される「走る」である。別義［１］から別義［５］までの概念を支えるそれぞれの意味特徴と、別義［９］の概念を支える意味特徴の間には、これら二つの異なる概念を支えている、共通する意味特徴を見出すことができる。その共通の意味特徴を比較分析すれば、別義［９］は別義［２］系統から派生したものであるとの知見を得る。

別義［９］によれば、人は移動行為の主体としてある乗り物という具象物と一体となって、その乗り物による移動行為に係わっている。そのある乗り物が「走る」移動動作を「人間」の代わりにしているが、その移動動作は人間の意志及び目的によ

臺灣大學學術期刊資料庫

って直接制御されている。

（38）1999 年のメキシコのグランプリ・レースでホンダの F-1（のレース用の車）は最高時速 350 キロを出して、遂にチャンピオン杯を獲得した。

（F-1 を運転しているのは人間）

（39）敵の陣地を目掛けて、馬は怒涛の如く走った。

（馬に騎乗して馬を操っているのは人間）

（40）船は海面を滑るように走る。

（船を操縦しているのは人間）

において、（38）文中の「走る」は「（人間の運転行為によって車と人間が一体となってカー・レース用の）F-1 の車が疾走する」動作を表す。（39）文中の「走る」は「（人間が騎乗して馬と一体になって）馬が疾走する」動作を表す。（40）文中の「走る」は、「（人間による操縦行為によって船と人間が一体となって）船が疾走する」動作を表す。

それぞれの「走る」動作の主体である「F-1、馬、船」は自らが自らの意思と目的で以って自力で早く移動するのではない。運転行為・騎乗行為・操縦行為などを直接的に制御する人間が自らの意思及び目的を持って、自分の乗った乗り物を仲介として「早く移動する」動作を行う。直接的に「走る」動作をするのは人間ではなくて乗り物ではあるが、人は間接的に「走る」という移動動作に係わっているのである。

関連して、「走る」動作の主体である「F-1」とその車を運転する「カー・レーサー」、「馬」とその馬に乗って馬を操る「騎手」、「船」とその船を操縦する「舵取り」、などのそれぞれの意味的な関係は、「全体―部分」の関係を示すメトニミーの関係に裏打ちされている。例えば、（38）文中の「F-1」というカー・レース用の車が「全体」を表し、運転している「カー・レーサー」は「部分」を表す。したがって、基本義からこの別義［５］へと意味的に拡張しているプロセスには、メトニミーを支

臺灣大學學術期刊資料庫

える「近接性」が意味関係に係わっていることが分かる。

10. 多義的別義 [10]

「はしる」の多義的別義[10]は、人が乗り物以外の何らかの道具を用いて、その道具と一体化して移動動作・行為を表す概念で、〈人が道具などと一体化して〉〈全力で迅速に滑らかに前方に移動する行為・行動・動作〉という意味特徴によって構成される「(物体が) はしる」という概念である。

まず、人が道具を用いて移動動作をする場合、「その道具が何らかの物体の表面上を接触しながら移動している場合とそうでない場合」の移動速度の差異について考える。人が道具を用いて何らかの移動動作をする場合には、移動動作が進行する空間を道具が何かの物体の表面に接触しながら移動する場合と、道具が何かの物体の表面に接触しておらずに移動する場合と比べると、前者の方が移動速度は遅くなる。加えて、この別義に属する概念は、全て移動動作に従事する動作主は何らかの道具を用いていて、その道具を用いている人の意思がその移動動作に直接的に係わっているものと解釈できよう。

(41) 急いで走り書きした手紙だから、読みにくいかも知れません。

における「走り書き」とは、「走りながら書いた」という意味ではない。「大急ぎでさっと書いた、丁寧ではない字で書いた手紙」という意味であり、この場合の「走る」は「大急ぎで(拙い字で手紙を) 書く」という動作を表す。そのため、基本義からこの別義へと意味的に拡張したプロセスには、メタファーを支える「類似性」に基づいた意味的な関係が係わっている。すなわち、「書き手が急いで書いた字が上手に書かれていなくて、まるで人が走っているかのように大急ぎでさっと書いた印象を受ける」という、「類似性」に基づくメタファーの意味関係によって、「はしる」と「大急ぎで素早く書く」という二つの意味関係が関連づけられているのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

次に、人が持っている道具が移動動作に従事する場合に、何の物体にも接触しておらず、空間を移動する場合の概念について考える。この場合は、時間的に一瞬間にしてもともとの状態が変化した結果、ある新しい変化した状態が発生する。

（42）月光を背に、刀がさっと走った。

における「走る」は、「刀を持った腕がさっと動いた」という移動動作を表現するが、基本義からこの意味へと意味的に拡張するプロセスは、メトニミーを支える「近接性」に基づいた意味関係が係わっている。「刀」と「刀を持っている腕」との間に見出される意味的な関係は、「刀」が「部分」を表現していて、「刀を持った腕」が「全体」を表現しているという意味関係にあり、「部分」によって「全体」を表現するメトニミーを形成する。聞き手は、このメトニミーを支える「近接性」に基づいた意味関係によって、「刀が走る」と「刀を持った腕がさっと動く」とが、意味的に関連づけられていることが分かるのである。

11. 多義的別義［11］

「はしる」の多義的別義［11］は、〈あるものが〉〈水が流れるように〉〈すらすらと迅速に問題なく〉〈出来上がっていく動作／出来上がっているありさま〉である。

（43）この文章は筆が走っている。

における「筆が走る」は、「実際に筆が歩かないで走っている」という意味を表現しているわけではない。「この文章は、まるで水が流れる如く、すらすらと流麗に書かれている」という概念がメタファーによって表現されている。基本義からこの別義［11］の概念へと意味的に拡張したプロセスには、メタファーを支える「類似性」に基づいた意味関係が係わっていて、別義の［3］である「水・川が速く流れる」という概念からメタファーに基づいて意味的に拡張していることが分かる。

12. 多義的別義［12］

臺灣大學學術期刊資料庫

「走る」の多義的別義［12］は、〈ある具象物をその一部を地表に接触させながら〉〈高い処から低い処へという一方向に向かって〉〈迅速にごろごろと回りながら素早く移動する動作〉という意味特徴によって表される「ころがる」という概念である。

（44）寄せて来る敵を倒すために、高い処から木を滑らせて転がすから、走り木をたくさん用意せよ。

における「走り木」の「走る」は、「滑らせてころがす木」の意味を表す。この概念は文語においても用いられていたもので、現代語においてもその概念を承け継いでいる用法である。下記を見られたい。

（45）身をあやぶめてくだけやすきこと、珠を走らしむに似たり。[12]

における「走る」は、「ころがる」という概念を表現している。

「走る」が「ころがる」へと意味的に拡張したプロセスには、メタファーを支える類似性に基づいている。すなわち、

（46）木が上から下へごろごろころがって移動する様子は、まるで乗り物がビュンビュン走っているように速い。

において、「ころがる」といる動作と「走る」という動作が「ある高いところから別の低いところへまっすぐ迅速に移動する」という意味特徴を共有している。加えて、メタファーを支える類似性によって、意味的に関連づけられているのである。

13. 多義的別義［13］

「走る」の多義的別義［13］は、＜ある具象物が空中を＞＜さっと素早く移動する動作＞という意味特徴によって表される「跳ねる」「爆ぜる」などの概念を表現する。

（47）栗を焼く時に、栗が走る。

（48）冬の朝に焚き火をすると、走り火がさわがしい。

[12] 吉田兼好「徒然草」『日本古典文学全集一第 21 巻』、第 172 段、永積安明校注・訳、1989 年度版、小学館。

臺灣大學學術期刊資料庫

（49）刀を作る時、真っ赤に焼けた鉄の塊を打つと、火花が走る。

において、（47）文中における「走る」は「パチッパチッと急激に爆ぜて空中を跳ぶ」状態を指す。（48）文中における「走り火」とは「パチパチと跳ねて空中を跳ぶ火の粉」を指しており、したがって「走る」は「パチパチとはねる」という概念を表現する。（49）文中の「走る」も（48）文中の「走る」とほぼ同様の意味を表現する。

この別義[13]の表す「パチッパチッと急激に爆ぜて空中を跳ぶ」「パチパチと跳ねて空中を跳ぶ」というそれぞれ異なる複数の概念は、共通する意味特徴を互いが部分的に共有している。そして、これらの意味の間に存在する意味的な関係は「家族的類似性」によって相互に意味的に関連づけられているのである。また、別義[12]から別義「13」へと意味が拡張した結果、別義[13]による「跳ねる」「爆ぜる」の二つの動作は、別義[12]が表すように「高い処から低い方向へところがって素早く移動する」動作ではなくて、「ある具象物が熱を加えられた結果、一瞬に四方八方へさっと迅速に移動する動作」を表現している。したがって、別義[13]によって表現される概念の方が、別義[12]によって表現される概念よりも、移動動作が時間的に瞬時に完了する点、及び、移動する交換の範囲も狭くて短距離である点、などに差異が見出せる。

最後に、この別義「13」によって表現される概念は、動詞「はしる」及び「跳ぶ」によって表現される概念の境界線上に位置するものであると捉えられることを指摘しておきたい。

14. 多義的別義［14］

「走る」の多義的別義［14]は、〈心身に激しい衝撃を受けて〉〈肉体的・精神的な変化がさっと早く発生した結果〉〈実際に肉体にその結果が鋭く残っている状態・ありさま〉という意味特徴によって構成される「残す・残存する」という概念である。

臺灣大學學術期刊資料庫

（50）あの男の顔には刀傷の跡が走っている。

において、（50）文中の「走る」は移動動作を表現せずに、人の肉体に鋭く残された傷跡の状態・ありさまを表現する。この多義的別義[14]の表す概念は、「ある物が人の肉体上を突然移動した結果、造成された軌跡・傷跡が残っている状態・ありさま」を表現する。別義[14]として拡張された新しく派生した意味は、この段階で、「走る」による文法化（grammaticalization）が見出される。文法化とは、例えば、本稿における考察の対象である「はしる」は、もともと「ある空間を迅速に移動する動作」を表現しているが、意味的な拡張に伴って、「空間的移動性の意味が薄れて、次第に異なる概念（例えば、あるものが突然移動した結果、発生した軌跡・傷跡が残っている状態）を表す意味へと変化する言語現象などを指す。[13] 別義「14」の場合は、移動を表現する性質の動詞から、状態を表現する動詞へと変化している振る舞いが見出せる。

15.多義的別義［15］

「走る」の別義［15]は、〈具象物が短時間に迅速に〉〈何の問題もなく起点からある範囲に亙って伝わって〉〈対象物はもとの姿を保ったまま〉〈表面に割れ目が入った状態〉という意味特徴によって構成される「罅が入る・割れ目が入る・疵ができる」という概念である。

（51）買ったばかりのお皿にもう罅が走っている。

（52）地震の後で、地面に割れ目が走っているのを発見した。

において、（51）文中の「走る」は「（皿が割れて割れ目が）（まっすぐ）入っている」「割れている」という状態・ありさまを表現する。（52）文中の「走る」は、「割れ目が長距離に亙ってまっすぐ続いている」状態・ありさまを表す。別義[15]によって表される概念には、通常、人の意志は係わっていない場合が

[13] 山梨正明 『認知文法』、1995年、ひつじ書房、p.63 － p.64。

臺灣大學學術期刊資料庫

多い。別義「15」は、別義「14」の表す「人の肉体上に残された刀による傷跡の状態」から、「具象物の上に割れ目・罅・疵などがまっすぐに入っている状態」へと意味的に拡張している。そして、これら多義的別義「14」と別義「15」という二つの別義の間には、意味的な連続性が保たれており、家族的類似性によって意味的に関連づけられている点が見出される。

16. 多義的別義 [16]

「走る」の多義的別義[16]は、〈具象物が長距離に渡ってまっすぐに横たわっていて〉〈その上を人や乗り物などが速く滑らかに移動できる状態〉という意味特徴によって構成される「まっすぐに横たわっている状態」という概念を表す。別義「16」は、前述した別義[15]の概念によって表現される、「ある具象物に鋭い割れ目のような線状の跡がまっすぐ入る」によって支配される意味領域を、更に広範囲に広げた意味領域を支配する新たな概念へと拡張したものであることがわかる。この意味的な拡張は家族的類似性に基づいているものと考えられる。

（53）今の時代は辺鄙な山の中でさえ、高速道路が走っている。

（54）鉄道の線路は海岸線に沿って走っている。

17. 多義的別義 [17]

「走る」の多義的別義 [17]が表す概念は、移動動作を表す「走る」の動作主が具象物から抽象物へと変化しているのを表す概念である。＜ある抽象物が＞＜自由に素早く回る動作・ありさま＞という意味特徴によって表される「抽象的なものが素早く回る動作・ありさま」を表す概念である。下記を見られたい。

（55）娘の婿には、知恵が走った者を迎えたい。

における「走る」が表す概念は、知恵が素早く回る頭のよさを指す。「知恵」は実際には走らない。「知恵」は人間の属性の一つである。ある人間の「知恵が走る」という意味は、「非常に

臺灣大學學術期刊資料庫

賢い、頭がよく回る、頭が切れる」という、その人間の属性を指す。「あの人はまるで知恵が走るように頭がいい」という直喩の表現が、「あの人は知恵が走る（知恵が迅速に現れることを喩える比喩）」というメタファー表現を基にした慣用的表現へと変化したものである。そして、その意味的な拡張にはメタファーを支える「類似性」によって、意味的に関連づけられているのである。

18. 多義的別義［18］

「走る」の別義［18］は、〈抽象的なものが〉〈短時間に素早く〉〈何の問題もなく起点である人から目標地点である人へと次々に広範囲に亙って移動する動作〉という意味特徴によって構成される「伝わる」という概念である。

（56）総統が銃撃されたというニュースが、一瞬にして全国を走った。

（57）部隊長による退却の伝令は、すぐさま全部隊を走った。

における「走る」の表す「伝わる」という概念は、「広がる」の表現する概念に比べると、その迅速さにおいて「走る」によって表現される概念の方が、「広がる」によって表現される概念よりも格段に速く伝わる動作を表す。また、通常、多義的別義［18］の概念には、その情報を聞いた人が第三者に「伝えたい」という意志を持ち、そして、第三者に直接「伝える動作」が係わっている。その上、不特定多数の聞き手が「伝える人」に変化して、再び不特定多数の聞き手に伝える。不特定多数の話し手が仲立ちとなって、それらの話し手（もともとは聞き手だった）による「伝える」という連続的な動作によって、情報・伝令が人から人へと素早く移動して短時間の内に伝わる状態を表す。別義［18］の場合は、「伝令・情報」が、物体とか道具ではなくて人を仲立ちとして、聞き手の意思と判断に基づいて、人の言葉を道具として用いて、不特定多数の人々の間に移動する動作が行われるのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

19.多義的別義［19］

「走る」の別義［19]は、〈人の感覚・心理領域に係わる抽象的な感覚が〉〈短時間の間に素早く〉〈何の問題もなく起点から広範囲に渡って相手に瞬時に伝わる動作〉という意味特徴によって構成される「伝わる」という概念である。この意味では、前述した別義[18]が表す概念と似通ってはいるが、別義[19]は「抽象的な感覚・感情」と係わっている概念である。加えて、伝わる時間の速度は速い。もし、「伝わる」対象となる範囲がある会場のように限定されている場合には、ある感覚・感情は一瞬にして会場にいる全員に伝わるという概念を指す。

（58）選挙演説の会場において、A候補者が演説中に妨害的暴言が飛んだ時、会場には一瞬にして緊張感が走った。

20.多義的別義［20］

「走る」の多義的別義［20]は、〈体言の下について〉〈そのものが迅速に或いは唐突に現れるありさま・状態〉を表現する概念である。

（59）大学院生はしばしば才気走っていると批判される。

（60）宝くじに当たろうとしている人々は血走った目で当り番号を確かめている。

（61）死にそうになってから、祖母は日本に一度行きたかったと口走る。

において、（59）文中の「才気走る」は「知恵が非常によく働くこと」という概念を表現する。この動作には、何も存在していなかった状態から知恵が現れた状態へと移動・移行することを含意している。（60）文中の「血走る」は「ある対象物を非常に集中して見続けた結果、目が充血してきた状態」を指す。この動作には、何の異常も存在しなかった目が、充血して真っ赤な状態へと移動・移行することを含意している。（61）文中の「口走る」は長い間秘めてきた思いを唐突に表面化させて他人に話す動作のことを指す。したがって、（61）文における「走

臺灣大學學術期刊資料庫

る」は、「秘める」という動作から「公開する」という動作へと移行する行為を含意している。その意味では、「ニュースが走る」と僅かに関連性が見出せよう。これらの三つの異なる概念は、用法上の類似性に基づいて、意味的に関連づけられていると考えられよう。

以上、「走る」の多義性に対して分析・考察した結果、「走る」によって表される２０種類の多義的別義を明らかにした。

（四）動詞「はしる」の表す複数の意味間に存在する意味的な相互関係に対する考察

動詞「はしる」の表す複数の意味間に存在する意味的な相互関係は、家族的類似性に基づいた「類似性」、及び、メタファーに基づいた「類似性」、並びに、メトニミーに基づいた「近接性」などに依拠して、相互に意味的に関係づけられている。そして、動詞「はしる」の意味は、中心的な意味特徴（プロトタイプ）によって構成される基本義の意味から、まず、中心的な四つの意味系統へと枝分かれする。そして、枝分かれしたそれぞれの系統を出発点として、更にそれぞれの四つの意味系統から新たに派生した意味が拡張される。その意味拡張パターンとして、プロトタイプから拡張された意味へと、類似性のリンクを仲立ちとして広がりを見せている点を見出すことができる。

しかし、類似性のリンクは、「はしる」の表す多義性の概念全体を一次元的に関連づけているわけではない。そして、この分布のあり方は、「はしる」の表す概念を支えるプロトタイプという中心的な意味特徴を形成する構成メンバーから、周辺的な概念を形成する構成メンバーへと、段階的に意味的に拡張して広がっていくことが認められる。そして、「はしる」によって表される意味的な概念は、移動動作の主体が「人・動物」から「具象物」へと変化して、更には、「抽象的な観念」へと拡張している振る舞いが見出せる。加えて、「はしる」の概念が

臺灣大學學術期刊資料庫

「移動動作」を表示する機能から、静止したもの、例えば、「傷跡、割れ目、敷かれた線路」などの状態・ありさまを表示する機能へと変化している点も見出すことができる。その外、もとの基本義の意味と意味拡張して発生したある種の新たな意味の間が、連続していることも明らかになった。

動詞「はしる」の表す意味的な拡張パターンは放射線状であり、名詞の多義性が放射線状に拡張しているのと同じ拡張パターンを示す。すなわち、動詞「はしる」の多義構造は、まず、意味的に中心的な四つの系統に枝分かれしている。そして、次に、枝分かれした後で、それぞれの系統から更に類似性のリンクを仲立ちとして、プロトタイプによる構成メンバーによって支えられる中心的な概念から、周辺的な意味を構成する構成メンバーによって支えられる概念へと、段階的に放射線状に広がるパターンを示す意味構造を成すものと考えられるのである。

三、今後の課題

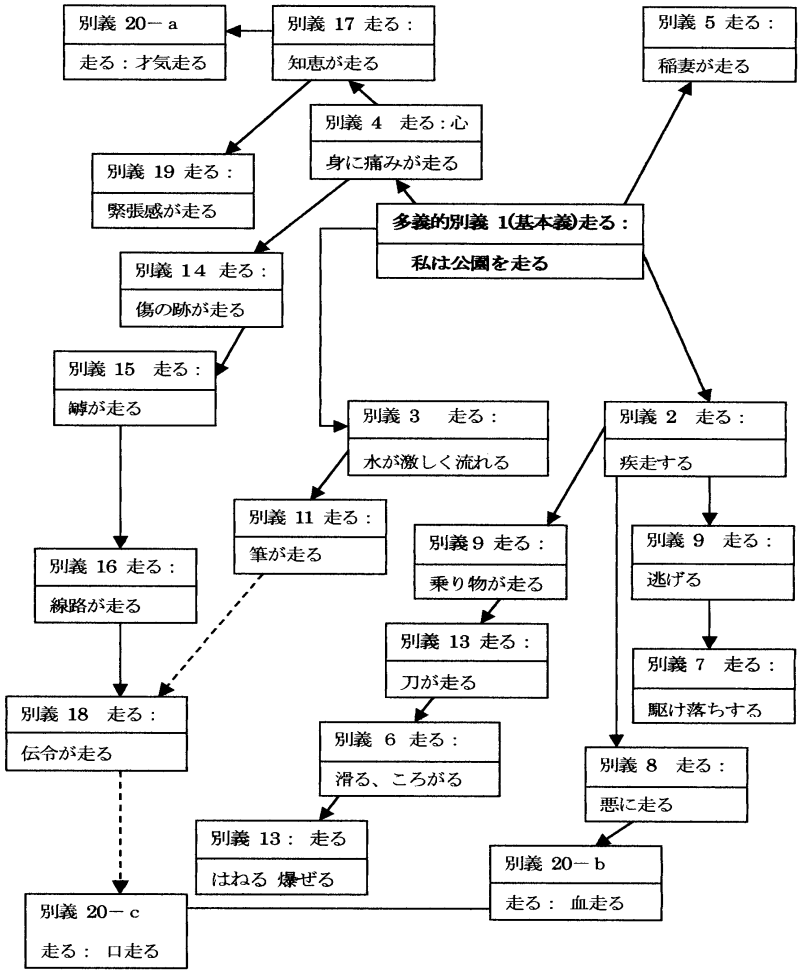
動詞の意味構造の解析に関する研究は未だ多くないので、「飛ぶ」「跳ぶ」の表す概念の間に存在する差異の分析とそれらの動詞の概念を形成する意味構造の解明を始めとして、より多くの動詞の意味構造を解明するのが今後の課題と言えよう。

四、まとめ

動詞「走る」の多義性及びその多義構造を分析・考察した結果、明らかにされた複数の多義的別義の間に存在する意味的な相互関連性、及び、意味的に拡大されたそれぞれの別義とその拡大パターンを、【図　３】に示してまとめとした。

臺灣大學學術期刊資料庫

【図　3】　　動詞「走る」の多義構造



臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

安部清哉（1975）「温度形容語彙の歴史―意味構造から見た語彙史の試み」『文藝研究』第108集、日本文藝研究会。

池上嘉彦（1993）『意味論――意味構造の分析と記述』、大修館書店。

河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』、研究社出版。

楠見　孝（1995）『比喩の処理過程と意味構造』、風間書房。

国廣哲彌（1982）『意味論の方法』、大修館書店。

――（1986）「語義研究の問題点―多義語を中心として一」『日本語学』5－9、明治書院。

佐藤信夫（1996）『レトリックの意味論』、講談社学術文庫。

鈴木重幸・鈴木康之（1983）『日本語文法・連語論』言語学研究会、むぎ書房。

瀬戸賢一（1995）『メタファー思考』、講談社現代新書 1247。

田中聡子（1996）「動詞『みる』の多義構造」『言語研究』110号、日本言語学会。

豊地正枝（2002）「名詞『花』の多義性に対する意味分析」、凱侖出版社（台北）。

―――（2004）『「XはYが＋述語形容詞」構文の認知論的意味分析―『花は桜がいい』構文に対する意味分析を中心に―』、慧文社。

新村出編（1990）『広辞苑』、岩波書店。

『日本古典文学全集―第21巻』（1989）永積安明校注・訳、小学館、（吉田兼好「徒然草」―第172段の記載）

久島茂（1994）「形を表す形容詞の意味体系」『国語国文』第63巻 第四号、京都大学。

松村明ら編（1991）『古語辞典』旺文社（志貴皇子「万葉集」・八巻・1418の記載）

籾山洋介（1993）「多義語分析の方法―多義的別義の認定をめぐって――」『名古屋大学日本語・日本文化論集』1、名古屋大学留学生センター。

―――（1994）「形容詞『カタイ』の多義構造」『名古屋大学

臺灣大學學術期刊資料庫

日本語日本文化論集』 第 2 号、名古屋大学留学生センター。

――― (1998)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩(メタファー・シネクドキー・メトニミー)」認知言語学フォーラム資料、東京大学。

山梨正明 (1995)『認知文法』、ひつじ書房。

――― (2000)『認知言語学原理』、くろしお出版。

Lyons, John. (1977) *Semantics I, II,* Cambridge University Press.

Waldron, R.A. (1967) *Sense and Sense Developement*, Andre Deutsch Publishers.

臺灣大學學術期刊資料庫